
双子の二人「シックスス」

レイン氷花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

双子の二人「シックス」

【Nコード】

N5120D

【作者名】

レイン氷花

【あらすじ】

双子の紅と蒼。紅は病弱貧血の天才高校生。蒼は運動神経抜群で妹思いな元気溢れる女子高生。二人は今日もトラブルに巻き込まれる！？

（前書き）

多分このシリーズは次ので終わりかと思えます。読者の皆様、今までありがとうございます。

ちなみに、双子の二人は今度から連載します。

この展開は久々だな。

「……すう……」

俺は今、桃と蒼に挟まれている。
桃はパンツだけで、蒼は全裸だ。
ここまではいつも通りなんだが。
ここに何故鈴が来る！？しかも俺の上に！桃、蒼でも瀕死なのに
トドメか！

「…紅君…。」

鈴の寝言か、てか夢の中でも俺の事？

「く、苦しい…。」

鈴め、何故に俺の上に、しかも俯せに寝ているし。むにゅん

うお！鈴の胸が押しつけられて形が変わってるし、柔らかくて気
持ち良い、じゃねー！今俺の理性は限界に近い！

どうする！俺！

鈴を退したら桃が蒼の上に落とす事になる。
俺はどうしたら良いんだ？

コンコン！

…こんな時に誰だ？

「入るよ、紅。」

声が聞こえ、入って来たのは唯一の友である涼だった。

「凄く良い寢床だね、紅。」

「どこが。」

「まあ、それは置いといてだね、紅に話があるんだ。」

俺は起き上がり、鈴を自分が寝ていた所に寝かせて、俺は生還を果たした。

「なんだ？急に改まって。」

コイツが真剣に話す時って大抵、やばいんだよな。

「僕と付き合ってくれ。」

「どこへ？」

「じゃなくてえ。」

何か、俺間違えたか？

「だからあ、僕の彼氏になってって言うてるんだよ？」

は？どうして？

「理由は……。」

口が開いたまま、涼の表情が固まった。

「どうしたんだ？涼。」

後ろを振り向くと、そこには蒼、桃、鈴の三人が寝ていた時と全く同じ姿で立っていた。

「『『『どういう事なのかな？涼？』』』」

三人の声がハモった。

「いや、その、これには深い訳があつて。」

涼はかなり動揺している。

「私達が寝ている時に告白とはどうゆう事かな？涼。」

蒼がかなり怖い顔してる。

俺はというと、完全に気を失…いかけ…て…ます…。

またまた俺の意識は途切れた。

【涼視点に切替え】

紅が突然倒れてきた。まあ、こんな光景を拝んだら、健全な男子は大体そうなるよ。

僕が見ても天国だと錯覚させるしね！

（レズめ。）

五月蠅いぞ、変態。

（お前に言われたくは無いぞ、涼。）

とりあえず黙れ、ム力つくから。後助ける。

（人使い荒いんだよ、貧乳凹凸無し女。）

おいしい？一回死んでみるか？ハツカ飴で。

（スイマセンごめんなさい冗談です、ハイ。）

分ければ宜しい。

（…チツ、色気無しのくせに…。）

死刑決定。

（ぎゃあああ止めてくれえー！！！）

自業自得だ。さて、現実逃避はこれくらいにしてと、どうしたらいいんだ僕は。

「涼？黙ってないで何とか言いなさい。」

蒼が顔をよせ…、て近い！近すぎるよ！？少し動いただけでキス出来るくらいだよ！？

「説明しろと言われましても。」

何か首筋に刃物押し付けられてるみたいな殺気がするうう！！！！

「『正直に話してくれたら優しく殺るよ？』『『

皆さんハモった上に、やる、が、殺るになってるよね！？
これって僕に対しての死刑宣告ですか！？

嗚呼、僕の人生って短かったなあ…。

（お似合いだぞ、凹凸無し女。）

お前は後でハッカ 100な。

（地獄耳〜！！！！）

「『『良い声で鳴いてね？』『『

目的変わってませんか、皆さん？

いいいやあああああ！！！！！！

只今、涼の悲鳴が響いています。

十分後。

「あの、何をしようとしてるんですか？」

普通聞きたくなりますよね？こんな状況に置かれたら誰だって。

「聞きたいの？涼。」

「いえ、聞く気無くなりました。」

「そう？まあ、聞かない方が良くかもね。」

あのう？蒼さん？そう言ったらかなり気になるじゃありませんか？
ちなみに恐怖の方もかなり増えました。

8

「大丈夫だよ？涼さん。」

すぐに何も思い出せなくなりますから。

トラウマにはならないので御心配なさらず。」

桃ちゃん！いつもの桃ちゃんに戻って！？

土下座するからお願い！！

「怖がらしたら駄目だよ、桃ちゃん。」

良かった、鈴ちゃんはまだ正気だ。

「後からジワジワと恐怖を刻み込むんだからね。
折角の楽しみが無くなっちゃうじゃないの。」

うふふじゃないよ！一番狂ってんじゃない！

今更だけど、何故僕が椅子に全裸で縛り付けられているのか、非常に気になります。

「準備出来たよ。」

蒼が死刑の準備が出来たと言ってますね。

「じゃあ始めましょう。」

桃ちゃんと鈴ちゃんが嬉しそうだねえ。

「じゃあ、それぞれの道具を取って作戦通りに。」

作戦通りについて、何時したの！？

てか、それは何に使う気なのですか？

僕が知る限りでは、○○プ○イに使う物に、し○をか○ち○うする時にし○をひ○く為の○具だね。てゆうか僕が知らないのまであるよ。

あつ、あれは痛そうって、待て待て待て！何で僕はこれらを解説してるんだ！？

みんな誤解しないでよね？！

これらに詳しいのは、ただ○○にちょっと皆より興味があったただけだよ！？皆もあつたよね？

（お前のはただの異常な性欲だろ？）

黙れ、万年発情期のプライドの低い駄犬。

(…お前は何なんだ?)

真実の探求者。

(違うだろ、お前のはただの中年のねっとりとした薄汚れた欲望だろっが。)

今更だけど、あんたっていつも核心に触れるよね。

(図星か?)

…半分はそうだよ。

(久々に負けを認めたか?)

ああそつだよ! どうせ僕のは汚れた欲望だよ!

(まあ、自棄になるのは別に良いけどさ。)

冷たいね。

(まだお仕置とやらは始まってもないみたいだぞ?)

「へ?」

私は現実を引き戻され、衝撃の映像を見た。

「これくらいかな?」

桃ちゃんは何かの液体を量っている。

「もう少し入れても害は無いよ、その薬は。」

蒼は桃ちゃんに助言をし、自分の持っている器具を見て笑っている。

「涼さん？覚悟は良いですか？」

覚悟は良い？て聞かれても良いなんて答える人いないんじゃないですか？

「じゃあ、始めるよ？」

蒼の顔が悪魔に見えましたよ。

そうして、涼の拷問が始まりましたとき。

十分後。

「う…、俺気失ってたのか？」

ギリギリギリ…。

「何の音だ？」

「紅…！」

「涼！？なんだそれ！？」

「助けて〜！」

「ブツ、はっ、鼻血出た！」

「紅！？」

紅は倒れた。

返事が無い。ただの屍のようだ。

「紅！？しっかりして！！」

この状態がその後六時間続いた。

涼の長い朝が続く。

（後書き）

読んで下さった皆様ありがとうございました。（次回あります。）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5120d/>

双子の二人「シックスス」

2010年12月3日07時10分発行